

聖書:ルカの福音書18章1~8節

説教:いつでも祈りなさい

はじめに

私がまだ会社員として働いていたときのことで、ある同僚の一人に私が教会に行っていることを伝えたら、「クリスチャンは祈ってばかりでなにもしない。それで問題が解決すると思っているのだろうか」と言われたこともあります。信仰を持たない方々から見れば、ごく自然な疑問でしょう。私たちも、祈ってもなかなか答えが与えられないようなとき、無駄なことをしているのではないかと疑うことがあります。そんな私たちにイエスは1節で「いつでも祈るべきで、失望してはいけない」と語っておられます。今朝は、祈りについてみことばからご一緒に考えてまいります。

## 1 たとえ話

### 1) 訴えるやもめ

イエスは祈りの大切さを教えるために一つのたとえ話を語ります。3節から5節。「この町に一人のやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私を訴える人をさばいて、私を守ってください』と言っていた。この裁判官はしばらく取り合わなかったが、後になって心の中で考えた。『私は神をも恐れず、人を人とも思わないが、このやもめは、うるさくて仕方がないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう。そうでないと、ひっきりなしにやって来て、私は疲れ果ててしまう。』」

詳しい事情はわかりませんが、このやもめは誰かに訴えられているけれど、それが根拠のない不当なものであるのを裁判官にさばいてもらう必要があると思って来たようです。

### 2) しぶしぶ応じる裁判官

しかしこの裁判官は、自分自身も神を恐れず、人を人とも思わない人間であると認めています。もちろんこれは話しをわかりやすくするための誇張です。ところがこんな人でさえ、あまりにもしつこいので、とうとう根負けしてしまい、裁判をしてやることにした。どんな相手でもかなうものがないと思われていたライオンが、小さなハエにうるさくたかられてすごすごと降参するような光景です。

### 3) 熱心に祈れば聞かれる？

さてこのたとえ話から私たちは何を学ぶのでしょうか。不正な裁判官でさえこのとおり。まして正しい神であるなら、祈りには必ず速やかに応えてくださる。あなたがたが熱心に祈れば必ず神は祈りに応えてくださる、あきらめてはならない。そう教えている。真っ先に思い浮かぶのは、そのような教訓ではないでしょうか。

## 2 人の子が来るとき

### 1) 「地上に信仰が見られるでしょうか？」

確かに8節の前半まで読むなら、それですっきりします。でも、この話しはそこで終わりません。8節後半の不思議なことばが続くのです。「だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」これが祈りとどんな関係があるのか。戸惑わないでしょうか。

「人の子」とはイエス・キリストのことで、「人の子が来るとき」とは、イエスが再び私たちのところへ来られる日。その日、二人寝ていると、一人は取られ、一人は残される。そんなふうに使われる者とそうでない者が分けられていく。だれが救われるのかと言えば、もちろん神を信じる者のはずです。ところが、イエスは、そのさばきの日に信仰を持っている者はほとんどないと言っているように聞こえるのです。もし本当にそうなら、救われる人はほとんどいない。そういうことになってしまう。これは大変です。私は本当に救われるのだろうか。急に不安になります。だからこそ、私たちは失望しないように祈り続けなければならないことなのか。ある宗教では、念仏を多く唱えれば唱えるほど功德があると教えているそうですが、やっぱりキリスト教も同じということでしょうか。

### 2) 祈りと失望

この箇所を考える鍵は、1節にあるように思います。もう一度読みます。「いつでも祈るべきで、失望してはいけないことを教えるために、イエスは弟子たちにたとえを話された。」

二つのことを確認しておきます。まず一つ目、イエスが祈りについて語った相手は弟子たちだったということです。二つ目は、祈りと失望がセットで出てきていること。このことからどんなことが言えるか。もしかしてイエスは、弟子たちが失望してしまうのではないか。そのことを心配して、あらかじめ

め祈り続けることの大切さを教えてくださいのではないのか。では、弟子たちが失望するような場面があったのか。それとも、弟子たちは立派な信仰者で、イエスの教えをよく守り、どんな試練のときも祈り続け、失望することはなかったということなのか。

### 3) 十字架で失望した弟子たち

そんなことはない。この後弟子たちがどうなったか見れば一目瞭然です。二週間前、受難週にちなんでイエスの十字架の場面を取り上げました。そのとき、周りには誰がいたでしょう。イエスをあざ笑い、ののしる人たちがあふれています。その中に弟子たちはいたのか。いるにはいました。けれどもそれはガリラヤから従って来たごくわずかな女たち。ペテロを初めとする使徒たちはそこにはいません。皆、逃げ出して隠れてしまいます。どうして主を捨てて隠れてしまったのか。ひとことで言えば、失望したからでしょう。では一体何に失望したのでしょうか。

二つ考えられます。一つ目。イエスは、イエスラルの王となられて、必ずこの国を救って下さるに違いない。そうなった暁には、弟子である自分たちは大臣に出世してこの世で名を上げるのだ。そんな望みを抱いていました。しかしかつぎ上げた大将であるイエスが逮捕されたとき、計画が頓挫したと知って失望した。二つ目。ペテロは皆の前で言っていました。イエスが行くところどこまでもついて行く。ところがいざとなったら、急に恐ろしくなってイエスを三度否定して逃げ出し、鶏が鳴くのを聞いて男泣きに泣いてしまった。つまり自分に失望してしまったということでしょう。なんて自分は弱い人間だったのか。1節でイエスは、失望してはいけないと言われてますが、結局弟子たちは失望してしまいました。そのことが8節後半のみことばに現れているのではないのでしょうか。「だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

人の子が来られるとき、これは人の子が十字架でさばきを受けるという意味ですが、そのときあなたも信仰をもっていますか。イエスはそのように問いかけていました。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 十字架のさばき

こうして見てくると、ここは祈りについて教えている箇所なのかと思っていたら、実は十字架と大きなつながりがあるらしいと気がつきます。という

ことは、このたとえ話も単なる祈りだけではなく、十字架と関わっているのではないか。そう考えるべきではないか。

そこで7節をもう一度見ます。「まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。」

いくつか確認しましょう。一つ目。さばきを行うのは誰ですか。神です。二つ目。では、だれのためにさばきを行うのですか。救いを求めて叫んでいる人たち、選ばれた者たちとも言っていますが、信じる者のためにさばきを行います。そこまではよい。では、三つ目。いったい誰がさばきを受けるのか。神を信じなかった者たち。そのとおりですが、それだけですか。では、十字架はなんでしょう。神のひとり子である方がさばきを受けられた場所です。そうしますと、「選ばれた者たちのためにさばきを行う」と言っているけれど、これはイエスにとって他人事ではなく、実はイエスご自身がここに登場してくる。

あの神を神とも思わず、人を人とも思わない、傲慢で情け容赦のない不正な裁判官でさえ、仕方なくさばきを行う。まして、正しい神であるならば、速やかにさばきを行う。つまり、神は罪人を救うために、十字架のさばきを速やかに行うと言っているのです。神の子であるイエスが、私たちの罪の身代わりとなってさばきをお受けになる。そう言っているのです。

### 2) イエスの祈り (22章32節)

イエスは「失望しないためにいつでも祈りなさい」と言われました。ところが弟子たちは、十字架におかかりになられたイエスを見た途端、信仰を失ってしまいます。彼らは祈っていなかったのでしょうか。そんなはずはありません。彼らだって祈っていた。11章にはこんなことが書いていました。イエスが祈っているのを見ていたひとりの弟子が、「私たちにも祈りを教えてください」と願った。それで私たちも毎週祈っている「主の祈り」を教えてくださいました。そんな場面です。ですから、彼らだって祈りの大切さは知っていたのです。

ところが、いざとなったら簡単にイエスを捨てて失望してしまいました。愚かな弟子たちを反面教師として、私たちはそうならないようにもって祈りなさいということでしょうか。もしそうなら他の宗教と変わらないと、先ほど言いました。ではどうするのか。身もふたもないような言い方をしますが、私たちにはどうもできません。その代わりイ

エスがしてください。22章32節。主はペテロにこう言いました。「しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。」私たちはもちろん祈ります。しかしそれでもいつか失望することがあるかも知れない。でも大丈夫。ペテロのために祈ってくださったイエスは、私たちのためにも祈ってくださっている。私たちが、あまりのつらさに信仰を失いかけるようなことになっても、主は弱い私たちのことをご存じ、あらかじめ守ってください。

### 3) 失望させられない (ローマ10章11節)

主の守りはまだあります。主に祈られていた弟子たちはその後どうなったか。彼らは、確かに一度失望はしました。でもそこで終わりません。彼らは復活したイエスに出会い、死の先に永遠のいのちがあることを知りました。

私たちはどうして失望するのでしょうか。いろいろ理由はありますが、突き詰めれば全部死と関係しています。自分であれ、愛する人であれ、死が目の前に迫ってくるとき、私たちは恐れて、失望してしまふ。ところがイエスによって、恐れていた死が取り去られました。よく「恐いものなし」言いますが、よい意味で私たちには恐いものがなくなつた。もう失望させるものがなくなっていたのです。もちろん、だからと言ってまったく失望しないわけではない。がっかりすることはたくさんある。それでも私たちはやがて真っ暗な闇の中に光を見つけます。パウロはローマ10章11節でイザヤ書を引用してこう言っています。「この方に信頼する者は、だれも失望させられることがない。」

たとえ地上に信仰がなくなつたかに見えるくらい、皆が失望し、真っ暗な闇のようになったとしても、主の十字架の死と復活は闇の世に光り輝いています。その光を信じるようにと、主はあらゆることをとおして私たちを励まして下さいます。